【書評】
Mark Murphy (Ed.), *Social Theory and Education Research : Understanding Foucault, Habermas, Bourdieu and Derrida* (Routledge 2013)

丹上麻里江

「理論（theory）」と「実践（practice）」。その順序や重なりをはじめ、厳密に考えるべきことはひとまず置いておくとして、両者の距離――例えば架橋の可能性や困難さを含め――に向き合うことは多くの理論家や研究者にとって、あるいはまた実践家にとって、それぞれに重要な課題の一つであるだろう。とりわけ「研究の社会的意義」などの言説が目立つ今日ではなおさら、その実質的な側面を強めているかもしれない。本書は純粋な哲学や思想の研究書ではない。しかしそのプラクティカルな意義を社会に提案する、勢いのある作品である。

本書は、イギリスを中心にした教育学領域の研究者、とりわけ大陸哲学（continental philosophy）と教育実践との関わりを重視して研究活動を展開する若手の著者、計一四名が分担して記したものである。その全体を貫いて個々の論文を紡ぐのは、哲学的・学術的な思想や理論と、実際の教育実践――概ね中学校から大学教育まで――とをいかに理論的・具体的に接近させ得るかを検討するという問題設定にある。まさに実践そのものであり、また理論上は哲学や思想、社会理論と分かち難い関係にある「教育」の領域は、幅広く、理論と実践の問題を改めて思考するための良き導きの「場」であることを示唆する書としても読むことができる。

本書はイギリスに加え、アメリカとカナダでも同時に出版された。イギリス以外で著者らが属するのはアイルランド、スウェーデン、マルタ、オーストラリアといった国々である。全体を編集したマーク・マーフィは、当時から現在まで、スコットランドに拠点を置くグラスゴー大学の教育学部で準教授（reader）の職にある。余談だが、グラスゴー大学はアダム・スミスの母校としても知られる。教育と公共政策を専門とする彼は、本書と問題設定を共有する複数の著作も出版し、また研究者のネットワーク構築にも力を入れている。上述の職を自身で「day job」として意識的に区別した表現を用いて紹介する様子からも伺えるように、研究活動そのものの社会へのインプリケーションを重視した研究者であるという印象がある。

さて、本書はマーフィによる Introduction に始まり、副題にあるようにミシェル・フーコー、ユルゲン・ハーバーマス、ピエール・ブルデュー、そしてジャック・デリダが取り上げられ、それぞれに対する各々三つの論文によって構成されている。理論や概況説明から実際の教育現場での応用例までを網羅的に触れることができるように工夫がされ、読者の幅広い関心に応えることを目指した内容になっている。本書の特徴の一つは、特定のディシプリンに限定しないスタンスを基礎に置いている点にある。取り上げられた四名はいずれも、現代の思想と知を代表するビッグ

ネームだが、人物によってセクションが分かれていることは、互いに議論が独立していることを意味しない。そうではなく、特定のディシプリンによって絶対的に規定されない方法（undisciplined approach）に開かれているからこそ、自由度の高さとしての利点と同時に、困難さといった欠点を「教育」の領域はもつ（p. 7）。その視点を共有して、近年教育学研究で注目されることの多い四者を取り上げつつ、包括的に理論と実践の架橋可能性を探索することが本書の主眼である。

Introduction で説明されるが、教育学の領域では従来、カール・マルクス、アントニオ・グラムシ、ジョン・デューイやパウロ・フレイレらの理論が参照されることが多かったが、それに代わって近年では本書の四名が、著名（well-known）で、よく議論される（much-debated）ようになってきた（p. 3）。各論文が参照する文献のリストを見ても、たしかにその様相は見て取れる。しかし、門外漢には難解で、高度に抽象的な概念を含む大陸哲学の思想や社会理論は、教育学の研究者や実践家の関心を惹きつけると同時に遠ざけてもきた。しかしそれは、個別具体的な読解ではなく、本書のように理論と実践とを絶えず往還しながら、両者を結びつける突破口や方法を探ることそれ自体を主題化したマテリアルがなかったことにも起因するというのが本書の見立てである。それを打開するムーブメントが、本書をはじめ、教育を対象に据える研究者のあいだで拡がりを見せつつある。

各論文で議論されているトピックは論文数も示すように多岐にわたり、着眼点も多様である。上述した趣旨を辿ること以外にも、近年の教育現場での諸相を知るテキストとしても読み応えはある。ここでは各議論の内容を詳細に紹介することはできないが、例えば、教材としての IT 機器の使用から「安全」の名目上に導入された CCTV カメラまで、学校教育の場におけるテクノロジーによる管理を、フーコーにおけるパノプティコンや権力の自動化の議論の延長線上にいかに捉えうるか。これは新型コロナ禍以後、技術導入が急速に加速した今日でもなおさら検討すべきことだろう。あるいはまた、高等教育を「選択」することの社会的背景をブルデュー社会学における階層研究の視座から。さらには「コミュニケーション力」などが重視されるなかでのデリダのエクリチュール論の再考といったように、多様な角度からの議論が交錯し、「応用（application）」——本書では Applying Habermas' theory や Derrida applied とするタイトルが見られるように「アプライ」することが重視されている——の意味を検討する契機がさまざまに開かれる。

欲を言えば、最後にもう一章を設けて改めて全体を紡ぐ言葉があれば、全体の意義を振り返る機会をもてたであろう印象があるが終章はない。しかしその不在はむしろ、読者それぞれの思考を開く——実践的に——余白として作用するのかもしれない。あるいはまた、本書の上でとは明記されていないが、本書が出版された頃に、マーフィが創設者兼共同編集者として「Social Theory Applied」と題したウェブサイトを開設したことが案内されているため、あわせて紹介しておきたい（www.socialtheoryapplied.com）。当サイトでは広義の「教育」に関連するという一定の共通項を持つが、教育学や社会学、あるいは哲学といった特定のバックグラウンドやディシプリンに限定しない、さまざまな実践家や研究者が集まることのできるオンライン空間が目指されている。実社会での理論の応用可能性を継続的に探る試みであり、開かれたプラットフォームを提供している。現在もサイトは継続されている。関心をもたれた方にはぜひアクセスしていただければと思

う。

マーフィは理論を過度に単純化（over-simplified）して応用することには関心をもっていない。理論と実践の中間地という審級に、一つの研究領域を拓く可能性を見出そうとする彼らの研究動向と内容を横目に参照することは、思想や理論の追究を専門とする研究者の側にとっても、普段とは異なる側面での気付きを与えることがあるだろう。また、本書のようにイギリスを中心にした教育学領域が、「脱構築」を含む思想の取り込み――ときに批判的検討も含めて――を能動的に試みる基盤の一つに定位してきたことも本書は示唆しており、それぞれの立場から理論と実践を思考する上でも、その点を視野に入れることは有益であるだろう。